
とある覚悟の魔術結社(マジックキャバル)

赤川島起

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックキャバル
とある覚悟の魔術結社

【Nコード】

N3335BA

【作者名】

赤川島起

【あらすじ】

某月某日。上条当麻達は平和な日々を過ごしていた。

そんな中、幻想殺し（イマジンプレイカー）を狙ったある組織が表舞台へと出てきた。

平和な日常から、上条当麻はまたもや戦いの渦に巻き込まれる。

彼らの目的は一体……。

科学と魔術が交わるとき、物語は始まる。

8月末 某日 英国

二人の男は向かい合っていた、真剣で重々しくて覚悟を決めた表情で。

「本当にいいのか？」

「構わない。」

その言葉は、迫力が…… 覚悟があつた。そしてなおかつ、強い言葉だった。

「お前が言っならいいが、責任は取らないぞ。」

「ああ、覚悟の上だ。だが嫌な役をやらせたな。」

「いいさ、目的を果たすためなら。……じゃあ、いくぞ！」

言葉の後一拍置き、覚悟を決めた男に触れる。

そして、触れられた男が光りだす。

光っている男は苦しんでいた。光そのものが苦しめているように。光を与えた男は、吹き飛ばされる。その光が、まるで暴風のように。

「……ぐはあ。つか……はあ……はあ……。」

男は吐血、いや、喀血していた。あまり大丈夫とは言えない出血量だ。

……だが、男の表情には、……笑みが浮かんでいた。

「くっ…、言わんこつちやない…と言いたところだが…、成功だ。しかし、…すさまじいな。」

「……いや、お前もよくやってくれたな。短い期間で、もう魔術を使いこなしている。科学者だというのに。」

この男たち、世界の禁忌をさらりと言い放っていた。互いの魔術科学サイドはお互いの領分を侵さない決まりだというのに。それを超えた男は言う。

「まあ、科学者独特の知識欲というものかな。…っと、そろそろ帰るよ。」

「もうそんな時間が、ゆっくりできねえな、お前は。」

「個人的な友人に会うだけだからな仕事をずっと休めはしないよ。」

「じゃあな、気をつけて行けよ。」

その言葉は、重い口調だ。あたかも、この時間が密会のように。

「学園都市の飛行機は別格だよ。ちいとばかり速すぎるけどね。」

そして、男たちはそれぞれの世界に帰る。決して交わることはない二つの世界へ。

そして、物語は始まる。科学と魔術が交わった物語が。

第1章 始まりの休日 break holiday

某月某日 日本 学園都市 第七学区 男子寮

本日は土曜日、学園都市は休日です。そろそろテストの時期かなと、ちよつと危機感を持っている生徒が多数いるこのとき、とある高校生は家電製品とにらめっこしていた。

「……………消費が速すぎる、つか小麦粉かさ増し大作戦がやくにたたないじゃねえかああ！」

叫んでいる少年の名は、上条当麻。ごくごく普通の学園都市の少年である。

よくトラブルに巻き込まれたり、日常的に不幸な目にあっているのが普通と言いだ難いのだが…………。

そんな上条当麻は家庭の経済事情を回復するため居候の大食いシスターに対抗して、小麦粉による手作りうどん、ピザ、簡単なパン、などの小麦製の料理による大食い対抗策を用意した。

だが、件のシスターさんは量の増えた食事に素早く対応し小麦粉料理とその具材までたいらげ、結局は量の多い食事に期待するようになってしまったのだ。

上条当麻の右手には『幻想殺し』という変わったチカラがあるのだが、この事態には全く役に立たないのである。

「……………ふつ、くよくよしたって始まらねえ。」

半ばあきらめ……………あきらめ状態の調子で発する言葉は、かなり弱しかった。

一方、その原因の居候。真っ白で豪華な（安全ピンがあるため、そう見えづらいが。）修道服を身にまとった銀髪碧眼の少女、インデックスが申し訳なさそうに言う。

「ごめんね、とうま。やりすぎちゃったかも。……………とうまの周りがすごく黒く、暗く見えるんだよ。」

インデックスは流石に悪いと思っているのか謝罪を口にしていた。本人も、当麻が、朝早くにがんばってうどんを作ったりしていたところを見ていたので、少し後ろめたいのだ。

作った本人の苦勞が、一瞬（文字どうり）で消し去られてしまったのだから。

最も、散々食べまくってしまったにもかかわらず、今ようやくそう思ったわけだが。

上条は普段聞かない謝罪の言葉を聞いて少し気を許したのか、少し間をおいてこんなことを言った。

「もういいよ、ってか、せっかくの休日だし買い物ついでに一緒に遊びに行くか？」

「いくいくー。スフィックスもいっしょにねー。」

パアツと負の表情から、天真爛漫な満開の笑顔になった。当麻はそれを見て、まあ、いいかな　とも思った。

「じゃあ、今日は近所のスーパーじゃなくて大きめのデパートにするか。」

「でばーと♪でばーと♪」

（インデックスも気分を良くしたことだし、まあ大目に見るか。：

……食材の調達達は慎重にしないと。まあ、ちよつとは一緒に楽しんでいくか。）

こうして上条当麻とインデックスは、デパートへ食料調達も兼ねてあそびに出かけたのだった。

窓のないビルその中で巨大なビーカーの中に人間はいた。

男にも女にも大人にも子供にも聖人にも囚人にも見える人間が。

その前に、虚空から人影が二つ現れた。

学園都市のエージェントであり、イギリス清教 必要悪の教会 所属の魔術師でもある男、土御門元春と学園都市の大能力者であり窓のないビル案内人『座標移動』結標淡希。

結標は、その能力ですぐにその場からいなくなった。

残った土御門は話す。魔術師の顔で。

「何が起こっているか分かっているな。……少しヤバイ状態だ、何が起こるか分からない。早急に手を打て、アレイスター。」

少し焦り気味な口調だった。いつ爆発するか分からない爆弾があるかのように。

「まあ、いい気分ではないな。ただそこまで焦ることでもなかつたが、やつらも手を出しづらい状況をうまく作つたものだな。」

「あれだけ『アンダーライン滞空回線』を、ばら撒いておきながら学園都市内で察知できなかったのか？」

「やつらは学園都市内ではなく、主に外に出て活動していたそうだ。あと今回の件は、『幻想殺し』と『禁書目録』にも協力してもらう必要があるだろう。」

「ふん、俺は今から出るぞ、何かが起こる前に阻止する。ただ、学園都市と同じでイギリス清教も手を出しにくい。今回は戦闘ではなく、あくまで調査だからな。だが、」

そこからは、怒りがこもった感情が感じられる。

「これにお前の言うプランが、組み込まれているのならいい加減にしろ。これ以上、表の友人に手を出すな。」

「前に別の男にも似たような事を言われたよ。それに、今回の出来事は計画外だ。私の仕組んだことではない。」

それを聞いても、土御門はどこか納得のいかない表情だった。

「ああ、今回はそういうことにしておこう。とりあえず俺は出る。異存ないな？」

「構わんよ。私とて、この面倒な状態はさつさと片づけたいものだからね。」

そして土御門は行った、残ったアレイスターは

「計画外ではあるが、プランは短縮できそうだな。」
アレイスターは笑う、男にも女にも大人にも子供にも聖人にも囚人にも見える表情で。

数時間前 英国 聖ジョージ大聖堂

「学園都市へ向かうのですか？」

少女の名は五和、イギリス清教 必要悪の教会 天草式十字凄教所
属の魔術師である。

「ええ今回は、私はおるかスタイルや建宮も動けません。今回は、
調査という形ですから。先ほど土御門にも連絡を入れました。」

答えた女性は、神裂火織。新生天草式十字凄教の女教皇様であり、
世界に二十人といない聖人である。その会話の中にはもう一人いる。
「今回は、五和に任せるしかないのよな。事態が事態だ、あまり周
りは騒いでもらっちゃ困るよな。」

その、男の名は建宮斎字。天草式十字凄教の魔術師で、神裂がいな
いときは教皇代理。

メンバーのまとめ役も担う男だ。

「あと、五和が向かうのは学園都市じゃなくてその近くの普通の空
港。そっちの方が都合がいい、おっと忘れるとこだったよな。」

「「？」」

普通の空港へ向かうことは知っていた二人だったが、その次の言葉
は聞かされていなかった。

「五和と一緒に向かうのはもう一人いる。本人の希望もあってな、
イギリス清教ではないが今回は特例だ。」

「誰ですか？」

五和は聞く。かえって来た言葉は……

「それは、——なのよな。」

「ええ——!!」「何ですって!!」

二人の女性は、普段からは想像もできない大声をあげた。無理もないだろう、その人物は二人も知っている人物だったのだから。

正確には話だけは聞いているが正解だが。

(……………がんばります。)

恋する少女は、ひそかに決意するのだった。

学園都市 第七学区 常磐台中学学生寮前

学園都市の五本指、名門常磐台中学校の学生寮の前に二人の少女がいた。

一人は『空間移動』のチカラを持つ大能力者、一人は『超電磁砲』と呼ばれる超能力者。

普通、寮の前で立ち続けることはないだろう。なぜ立っているかと言うと、単純に待ち合わせをしているからなのである。

「御坂さん。」

少女に向けて、甘ったるい声が響く。待ち合わせをしていた友人の声だった。

「あつ、佐天さん 初春さんこっちこっち。」

「こちらですよ。」

合流したので早速目的地へ向かう。目的地へは徒歩。ちょっと遠いが歩いていけない距離ではないからだ。

その間、女の子特有の何気ない会話をしながら歩いていく。

「そういえば御坂さん、」

「なに？佐天さん。」

「初春から聞きましたよー、ある男子高校生とデートに出かけたとか。さっすが大人ですねー せんぱい。」

「で、デートって、た、ただの罰ゲームよ。ほ、ほら大覇星祭の。」

「そういえばお姉さま、いったいあの後何をしたんですの。……もしかして、もうあんなことやこんなことも……きいー、あの類人猿がああ。」

「なにもないわよ！何であのバカと、そ、そんな状態にならなきゃいけないのよ。結局あのはぐらかされたのよ。くっ、思い出したら腹が立ってきた。今度会ったら覚えてらっしゃいよ、あのクソバカあー。」

「み、御坂さん落ち付いて、そんな強い電撃を人に向けて撃ったら死んじゃいますよー。白井さんも、その怖いオーラを何とかしてください。」

「無理だと思うよ初春。二人とも、もう何も聞こえてないと思うから……。」

この二人がこんなに取り乱すなんて、いったいどうゆう人なんだろうと二人は思ったが口に出すと突っ込みが返ってきたのでやめといた。

あまり刺激しない方がいいだろう。

そして、興奮していた二人も落ち着いてきて会話が再開される。

「で、初春にはそういう恋愛じみた話って聞かないよねー。」

「むう、佐天さんだってそうじゃないですか。人のこと言えません。」

「初春のくせにー、このっ。」

ガバツ、と初春にスカートめくりをするものの、初春はとっさにガードすることができた。

結果的に太ももまで見えるものだったが。阻止はできた。

「っ——、危ない。スカートめくりはもうやめてくださいよー、

佐天さーん。」

「まあまあ、挨拶みたいなもんだし。」

「ハッ、では私もお姉さまにするのも挨拶ということに……。」「なるわけないでしょ。」

ズガンツ。

「アォ！」

自業自得である。

（そろそろ何かに目覚めそうだ…。）という心配を御坂はちょっと本気で最近している。

「あ、あの、い、今から向かうデパートって、学園都市の中でもトップ5に入るほど大きいとこみたいですよ。」

「佐天さんは、どこを見てみたいですか？」

「うーん、服だと御坂さん達は無理だし……。御坂さん達はどこがいいですか？」

「私はあそこにある、スポーツセンターがいいかな。お金払ったら遊び放題だし。」

「わたくしは、パジャマや下着などを見て回りたいですね。」

「じゃあ、スポーツセンターの次は昼食、デザートを食べ、デパート内のセブンスミストの支店に向かうということでもいいですか。」

「なーんか、初春の私情が混じってたみたいだけどそれでOK。お二人はどうですか？」

「いいわよ。」

「構いませんわ。」

平和な時間を過ごす少女たちは向かう、ショッピングをするためにとある少年も向かうデパートへと。

「着いたー。」

第一声を放つインデックスの横で上条は思う。

(……………でけえ……)

それもそのはず、学園都市の数あるデパートの中でも大きさならば第4位、総売上 第2位、利用客数第1位という最大級のデパートなのだから。

「じゃあインデックス、昼飯の前にどこ行きたい？」

「うーん、お昼ごはんの前なら……ゲーむせんたーがいい！」

うーん、と上条は少し考える。ゲームセンターはお金のコントロールがしやすい。

そこでうまくお金を浮かせば、昼食をランチバイキングにして普通に満腹になるまで食べさせるより安く済むようにできるだろう。考え終わった上条は言う。

「よし、じゃあそうすつか。というわけで……、勝負といくか？ インデックス。」

「のぞむところなんだよ！とうま、絶対負けないんだからねー。」
なにをー、と、ちょっとけんか腰気味ながらも楽しそうな二人は中に入って行った。

その様子を見ている二人の視線にも気付かずに……。

第2章 集合する者たち battle start

デパートの中にあるものとしては、かなり大きいゲームセンターでインデックスと対戦した上条はほぼ全勝。終盤でやり方を覚えたインデックスに一泡吹かされてしまったわけだが…。

そして現在、ランチバイキングにて絶賛食事中である。最後に上条に勝って気分を良くしたのか銀髪シスターの食欲に磨きがかかっている。ランチバイキングなので料理の種類は少ないが、あまり関係がないようである。

「おいしい！おいしいんだよ、とうま！ほんとにいくらでも食べていいの？」

「ああ、ランチバイキングだからな、食べ放題だぞ。」

「とうま、バイキングは日本以外じゃあまり通じないんだよ、もぐ。」

「えっ、そうなの？」

「もぐっ、ごっくん…うん、主にビュッフェやビュッフェって呼ばれるの、バツフェっていうのも同じ意味なんだよ。バイキングじゃ海賊になっちゃうんだもん。」

へえー、と素直に感心する上条。英語など、外国語はからつきしなものにもかかわらず頻繁に外国に行っている上条にとっては役に立つ豆情報である。外国についてはあまりいい思い出がないのだが…。

「当麻、この後どこ行くの？もがふぁ。」

「ああ、帰るのにも時間がかかるし、生活用品と食品を買ったときはいけどインデックスも必要な物あるか？」

するとインデックスが。

「あ、ああ、確かに買いたいものもあるかも…。」

なぜか顔を真っ赤にするインデックス。それに気づかない当麻は。

「ん、まあ、そりゃあるよな。じゃ、一緒に買いに行くか。」

「え、あ、うん…、当麻がお金持ってるし…。(ボツ)」

「?じゃあ、食い終わったら行くから買うものまとめとけよ。」

「うん…………。(とうまの鈍感!)」

「?」

何か違和感を感じた上条だったが、インデックスの心中などわかるわけもなく店を出る二人なのだった。

(うーん、なるほどインデックスの様子がおかしかったのはそういうわけね。はいはい。)

現在、上条がいるのはセブンスミスト支店の下着売り場少し離れたベンチである。ここに着いた時、インデックスにお金を求められ、絶対に見ないでと念を押され、そういう上条はインデックスに噛みつかれたくないし、何より自分も下着売り場には入りづらいということもあるのでベンチで座って待っているわけである。

(うーん、インデックスのやつ大丈夫かな、お金って言っても女物の下着なんて値段知らないし、あの金額で大丈夫なのかな?まあ、買いすぎはしないだろうけど…)。

上条がそう考えているとき、同じ下着売り場から出てきたとある少女たちの声が聞こえてきた。

「うーいはーる、アレはどうだったかな。スーパーブラック!」

「むりむりむり、ぜったいたいむりです!佐天さん、私の年齢を少しは考えてください!」

「えー、似合うと思うけどなー。」

「私にはまだ早いです。」

「…………へーま、だ、ねー、じゃあいつかは穿くんだ。じゃあ今から戻って買いに行こう。」

「やめてください、絶対佐天さんは私に穿かせるつもりですし、も

しいつか穿くにしてもサイズが合わなくなりますよ。」

「ちえっ、ばれちゃったー。」

（なんかすごい話してるな。今の女の子はこんな話までしているのか？）

「つていうか黒子。なんだったの、あの下着。」

「はあ、私には普通の下着なのですが…。お姉さまの下着が子供っぽいのが、そう思う原因なのではありませんこと。」

「つてそんなの言わなくていいでしょ。大体、黒子に注意される理由なんてないわよ。アンタは、私の保護者じゃないんだから。」

「ほ、保護者！お姉さまの保護者！ああ、それも黒子がいいと思いま…。」

「それ以上言うな！」

「あううっ！」

「し、白井さん大丈夫ですか？」

「御坂さんも、もうちょつと手加減なくちゃだめですよ。いくら白井さんがタフだからって。」

「大丈夫、これくらい日常茶飯事だから。」

（…………不幸だ…………。）

その様子を見ていた上条はまずいと思った。できれば今すぐ逃げ出したいがこのままダッシュすると音でばれてしまうし、インデックスに、何で置いていったのか説明してほしいかも！ガブッ！ということになりかねない。いろいろ考えて上条は、気配を絶って立ち上がり自販機の陰に隠れようとグルッと向きを変えて歩きだした、………が、焦っていたため、自動販売機の陰に隠れていた据え置き型の金属製のゴミ箱に盛大に足をぶつけてしまった。

ガッ！とかなり大きい音を出し、片足でぴょんぴょん飛び回る。

「いっ……………つう……………」

「？何、今の音……って、アンタ何やってんの？」

「？御坂さんのお知り合いの方ですか？」

「お姉さま？どうされ……って、また殿方さんですか？」

「あれ、白井さんもお知り合いですか？私と初春はこの人は知りませんけど……。」

ズンズンと上条に近寄る御坂美琴。それに続く三人。

ものの見事に、見かけてから5秒ではれた上条さんなのだった。

「……不幸だ。」

「そーれーはー、私に会ったからなのかぁーこのバカアーツ。」

ビリビリ、と電撃をわりと本気で撃ってきた。それを、足の痛みに耐えながら何とか右手を出して防ぐことができた。

「人が痛がっているときに電撃を撃ちますか？はい、あなたは鬼ですか？」

「どうせ効かないでしょうが！いつも防いでいるあんたに言われる筋合いはないわよ。」

そのやり取りを見ていた三人は、結構なショックを受けていた。佐天と初春は、上条の『幻想殺し』を知らないし、白井にしても御坂がこんな風に電撃を躊躇なく（効かないとはいえ）上条に撃つことまでは知らなかったのだから。

「えーと、御坂さん。とりあえず落ち着いてください。」

「初春の言う通りです。まず私たちにも状況を説明してください。」

「お姉さま……。いつもこんな感じでこの殿方に電撃をぶち込んでいるんですの？」

御坂が落ち着いたところで、自己紹介である。

「は、初めまして。初春飾利です。白井さんとは『風紀委員』の同寮で、御坂さんとはお友達です。」

「はじめましてー。佐天涙子です。初春とは親友で、そこから御坂さんや白井さんと友達になりました。」

「えーと、上条当麻です。まあ、ただの高校生です。」

「もしかして、噂のあのバカさんって上条さんのことですか？」

「……………御坂。お前そういう風に言ってたのか？」

「なによ、別にいいでしょ。」

いや、結構覚えられ方に問題がある気がするのですが…。と思った上条だったが言うのはやめといた。また怒らせるのはあまり良くないだろう。

「そういえば！あの時御坂さんの電撃を打ち消したのってどんな能力なんですか？レベルはいくつですか？」

「さ、佐天さん失礼ですよ。」

「『無能力者（レベル0）』だけど？」

「……うそおつ！」「」

二人だけでなく白井も驚いていた。能力チカラがあるのは知っているが『無能力者』だとは、白井も知らなかったのだ。

「アンタの能力、えーと…『幻想殺し』だっけ？何で、『無能力』になつてんのよ？絶対何かあるでしょ。」

「『幻想殺し』…ですか？聞いたことない能力ですね。」

そしたらちよつと考えて佐天が。

「あーっ！もしかして、都市伝説の『どんな能力も効かない能力を持つ男』って上条さんのことだったんですか？…ってあれ？何で御坂さんはそのことを言わなかったんですか？」

「うっ、……………え、えーと…。」

言葉が詰まる御坂。あまり言いたくはないだろう。ずっと追いかけて勝負を仕掛けておきながら、勝てないどころか全戦全敗だなんて「とうまー。買ってきたよ……………って短髪！何で短髪がいるの。あと何でこんなに女の子がいるのかな？とうま。」

レジで精算し終わったインデックスが帰ってきた。御坂にとってはいいタイミングだが、上条にしてみれば、なんかものすごい覇気を纏っているインデックスにびくびくしているのだ。

「え、えー、偶然出会っただけですし、この三人は御坂の友達みただから特に自分は関係ないのですが…。だから、噛みつきは勘弁してほしいのですが…。イ…インデックスサン？」

今にも噛みつきOKですと言わんばかりのこの状態。

一刻も早く抜け出したい上条に助け船がやって来た。

「初めまして、インデックスちゃん……でいいのかな？佐天涙子です。」

「初春飾利です。よろしくね、インデックスちゃん。」

「え、あっ、うん、初めまして、インデックスって言うんだよ。正式名称は、^{ルネーム}Index-Library-Prohibitor^ムum。でも呼び名は、インデックスがいいかも。」

インデックスは、佐天と初春と自己紹介して落ち着いたようだ、とにかく噛みついてくる心配が無くなった上条は言う。そろそろ、食料を調達しておかないと帰りに時間がかかってインデックスに、おなかすいたーと噛みつかれること請け合いなのだ。

「つと、そろそろ食材を買わねーと。行くぞ、インデックス。じゃあ、また今度。」

「あ、はい。さようなら。」

「また今度。インデックスちゃんもまたねー。」

「あ、うん。バイバイ。って、待ってよー、とうまー。」

そのまま別れて、その場を離れた二人だった。

そのまま二人と別れ、しばらくすると一気に質問攻めにされた御坂だった。

「上条さんとはどういった関係なんですかー？そこんとこ詳しく。」

「佐天さん、ストレートすぎます。もう少し別の言い方があるんじゃないですか？」

「お姉さま、いったいどんな経緯でお知り合いになられたんですの？そこんところ、詳しくお聞かせ願います。」

「え、ちよつ、そんなにいつぺんに聞かないでよー!」
顔を真っ赤にして、声を上げる御坂だった。がそのあと質問タイムはたっぷりと続くのであった。

「うーん。今日の夕食は何にしようか？豆腐つてのもありか？」

「ひややつこー、にするのとうま？それも食べてみたいかも。」

現在、デパートの食品売り場で食料調達に来ている二人だったが上条さんちのお財布事情はあまり芳しくなかった。この状態では、うまく買い物をしないとその後が持たないのだ。

「豆腐もいいが、大量に買った方が結果的に安上がりなんだよな!」

豆腐の足は早いけど、ちよつとづつ使っていけばいいんだし…。：

……ちよつとで済めばいいけど。」

「あつ、試食こーなーだ。いつてきまーす。」

「…ほどほどにしろよ。」

正直、試食の食べすぎでブラックリストに載るってことは避けたい。そんな事を考え、頭をかきながらカートを押して行った。すると、

バリン、と出入口あたりからガラスが割れる音がしてそのまま上条の頭に何か飛んできた。

出入口から離れた食品売り場。そこに届くような変則の曲ってきた何か。しかし上条が頭をかいていた手は右手。

バギン、と何か異能の力を壊した音がした。

(!…何かされた…、いや…、されそうだった。でも何で?)

考えるが、答えは出ない。しかし考えることはやめない。最良の選択肢を取るために。

（今回、狙われたのは俺。ってことなら。）

上条は走る。店の外へと向かって。店の中は突然、ガラスが割れた音に困惑している。当然、それが事件性のあるものだともあまり考えてはいない。

（ここじゃあ、ほかの人が巻き込まれるかもしれない。逃げるにしろ、戦うにしろ、ここから離れた方がいい。）

「とうま！」

先ほど行っただけのインデックスに呼び止められた。

その表情は、いつも見せている表情ではなく魔術師の表情。^{かお}禁書目録としての表情だった。

「とうまは、またそうやって突っ走っていくんだから。今日こそは私も行くんだよ。」

「ダメだ。いや、インデックスさっきのは魔術か超能力かわかるか？」

「たぶん、超能力で間違いないと思う。魔術や魔力の痕跡が周りに全く残ってないもん。」

「じゃあ、インデックスはここで待て。俺は、様子を見ながらどうするか判断する。」

だめなんだよ。と言いだしそうになったインデックスだったが、突然二人は止められた。

「勝手に、行動しては困りますの。ここは、わたくしの出番ですよ。」

ガラスが割れた場所とは別の出入口近くで立ちふさがったのは、白井だった。

「アンタ、またトラブルに巻き込まれているわけ？」

御坂もいた。その後ろには先ほどの二人、初春と佐天が心配な表情

で、また、真剣な表情で立っていた。

「わたくしは、『風紀委員^{ジャッジメント}』ですの。あなた達のような一般市民を守るための組織です。ですから、大人しくしてほしいんですの。」その眼に映るのは誇り、そして信念。以前の借りを返すというのも受け取れるだろう。これを邪魔するのは、あまりにも無粋。

「わかった。御坂、インデックスを頼む。」

「ちょ、アンタはどうすんのよ!」

しかし上条は向かう。出口へと、自分を狙う者のところへと。

「白井、お前に頼みがある。」

「何ですの?」

「俺が囷になる。その間に、上から探して見つけ出してくれ。」

そしてそのまま、白井が止める間もなく行ってしまった。危険が待ち受けるところへ、白井を信用しているからこそとも言つように。

「……はあ。ですからあなたは、怪我が多いんですよ。…今回はそれをさせないようにするのがわたくしの役目といったところでしょうか。」

一呼吸置いてからその場の仲間たちに言う。言葉を交わさずとも、思いは同じだ。

「お姉さまと佐天さんは、その子を見ててくださいな。初春は監視カメラからわたくしをサポート、デパートにパソコンを貸してもらえば問題ないでしょう。いいですね?」

「は、はいっ。」

「ちょ、黒子。わたしは、」

「お姉さま。」

御坂が言う前に、白井が遮った。ここは自分の出番だというように。「これはわたくしの使命です。」

それ以上、御坂は問い詰めることができなかった。白井が能力^{チカラ}をつかい、虚空に消えたからだ。

平和な日常が戦場へと変わる。そして、戦いは始まる。とある者たちの戦いが……。

上条は走る。走っているところは、不良がいそうな路地裏だ。

狭く、走るのに向いているとは言い難いが少なくとも周りの人を巻き込む心配は少ない。

しかし、自ら囷になると言った上条だったが、正直、ただ走って様子を見ることしかできない。

自分を狙ったやつがどこで何をしてくるかなど、わかるわけもない。しかも、撃たれたモノは曲がるモノ。

もしかしたら、ヒットアンドアウェイかもしれない。それでも、上条は走る。

「そこまでよ。」

突然、正面の曲がり角から出てきた女性が声を放った。

服装はシンプルなもの、ジーンズと濃い緑色の無地のインナーの上に白衣を着ているというよく見る研究者のような格好をしていた。

年齢は、24から27ぐらい。鋭い目つきをしており、美人でもありかつこいいとも言える外見だ。

「大人しくしてれば乱暴なことはいないのだけれど、言うことは聞くのかしら？」

それは、言うこと聞かなければ乱暴を働くと暗に言っていた。およそ、この女性が上条を狙ったのであるう。

「テメエ、いったい誰だ。何が目的で俺を狙った。あいにく俺にはそんな価値のないただの高校生なんだね。」

そこまで言った上条はハッと気づいた。

「……まさか……インデックスか!？」

正直、科学サイドが何を狙っているかわからない。しかし、上条の身近にある貴重な何か。

行き着く結果としては、^{インデックス}禁書目録。科学サイドが魔術サイドの知識を知りたいとも、考えられなくもないだろう。

「違うわ。確かに禁書目録の知識は欲しいけど、そのためにイギリス清教に大義名分を与えたくないの。」

そう答えてから、一息ついて。

「いくつか質問に答えておくけど、私の名前は由香里。欲しいのは……あなたの、能力^{チカラ}よ。ちょっと気絶してもらってるうちに回収したかったけど失敗しちゃったからここまで来たわけ。」

「は？何で『幻想殺し』を狙う。そんな大層なものか？」

「『幻想殺し』の力を利用したくてね。どうせ正面から頼んでも邪魔されるとわかってるしね。」

つまり、普通の人なら断るようなことをさせようとしているのだ。そこまで言い切ることができるのだから。

（ここは、路地裏。白井の能力で上から探すように言ったが、建物の陰で見つけるのは難しいな……。巻き込みたくはないが、頼りなるからな。）

「ああ、始めに言っておくけど、あなたのお仲間さんは私の仲間に出会ったそうよ。たぶん今戦闘中ね。」

「何っ！」

そこまで考えが回らなかった。気づくべきだったのだ、相手が複数いる可能性があることに。

「じゃあ、さっさと済ませたいし……いくわよ。」

言葉と同時に、由香里と名乗った女性は構えた。

だれもが一度はやったことがある、手で銃の形を模した構え、『手銃』。

しかし、そこから弾が発射されることなど普通ないだろう。

しかも撃ちだされたのは透明な弾だった。

（！？この）

とつさに右手を出した。

すると右手にあたった透明な銃弾は消え去る。

この力は確実に能力。

だが、女性は学園都市の生徒ではない。

超能力は通常、『時間割り（カリキュラム）』を受けていない者が、振るえる力ではないのだ。

「てめえ…何で能力を使える。生徒…じゃないよな、その様子じゃ。」

「

「ええ、でもね…科学者が自分の体を使うこともあるのよ。ほかの
とこだとやってないけど、ね！」

今度は、両手で構えて撃ってきた。

何発も連射された透明な銃弾は右手一つじゃ対処できない。

そもそも銃弾の速度は人間の動体視力では、完全に見切ることなど
できるわけではない。

撃たれる前に回避の態勢をとっていた上条は低く構え、右手を盾に
しながらかわした。

かわすことはできた、しかし狭い路地裏では飛び道具相手には不利
だ。

後ろにあった曲がり角に入りとにかく狙われないようにする。する
とある点に気がついた。

（！？あの流れ弾にあたったゴミ箱に穴がない。当たって吹っ飛ば
されてはいるが貫通していない。それにあの弾、透明だったが不自
然に光が曲がつっていたから軌道が目に見えた。）

上条が考えを張り巡らせていると。

「気づいたかしら？」

上条の様子を見た由香里が話しかけた。彼女の様子としては、余裕
が感じられるが油断していないと隙がない。

テレキネシス

「この能力は、『念動力』の一種なんだけど物体を持ち上げるより
力を凝縮して放つ方に特化しているの。いわば、素手で銃を撃てる
能力。現在の弾の威力はゴム弾程度。力が凝縮されているから、光

なんかは勝手に動かされて弾は見えちゃうの。」

そのような力は上条も知っている。

大覇星祭の時、棒倒しで上条達が使った戦略で『念動力』の槍を使ったのだ。

しかし、光が曲がるほどの力の凝縮されたものではなかったが…。

「これが私の能力『オールウェポン完全武装』。ちなみにこんなこともできるの。」
そう言つて、おもむろに上条のいる角の前に何かを投げた。

その様子からして、銃を撃ったというより…。

（！やばい。）

とたんに、投げられたものが爆発した。

実際は、無理やり凝縮されていた力が一気に解放されたという方が正しいだろう。

（手榴弾まで使えるのかよ。）

何とか右手で防ぐことができた。

威力からして、当たっていたら一発KOだろう。

そして、わりとあっさりした様子で由香里は話す。

「一応言つとくけど、この能力は、大能力（レベル4）クラスだそうよ。当たればそれでけりがつくわ。」

ただし、上条の目の前で構えながら話している。

その手には能力を使った棒状のものを持ち、振りかぶっている。

その形は、刀を模していた。

（コイツ、俺に手榴弾が防がれることがわかってて）

ドッ！と上条が構えていた右手の下、鳩尾に由香里の一撃が決まった。

「ぐはっ。」

完全に決まった。

だがそれだけで、上条が切断されることはなかった。

そのまま吹っ飛ばされ、仰向けに倒れる。

しかし、いくら能力を使ったとしても女性研究者の腕力なので、上条が考えるだけの余裕はあった。

（切れていない？ってことは、たぶんそこまで鋭くすることはできない。生け捕りで鋭くしてないって可能性もあるけど……。でも、さっきの刀はもう消えている。あくまで力を放出しているだけって言ってたからきつとこの大きさと長くは持たない。）

だが、威力は研いでいない刀で打ち込まれたというレベル、峰打ちだ。

何度もくらってられるものではない。

（不用意に近づけば、刀の餌食。かといって距離を開ければ、銃弾の餌食。逃げようにも大通りに出れば他の関係ない人を巻き込む。くそっ！）

上条の出せる手はもう限られていた。しかし、もう選ぶ時間も余裕もなかった。

数分前

「いませんわね。」

『カメラも上条さんが路地裏に入つたので役に立ちません。路地裏では武装無能力集団がすぐ壊しちゃうからカメラが設置されてないんです。』

白井は、とあるビルの屋上にいた。

そこで初春と電話し情報を得ようとしたが、なにも出てこなかった。なぜこのビルの屋上にいるのかというと、デパートの出入口のガラスの割れた場所の延長線上、つまり上条はここから狙われたのだ。ただし、弾が曲がっていたことから別のところだろうとも思うが、しかし、痕跡がある以上ここで確実だろう。

「こちらは、何かあると思いましたが無駄足だったようです。」
『そうですか…。上条さんの様子はどうですか？』

「今のところ走り回って変化はありませんの。このまま探索を続けますからもう切りますわよ。」

そう言つて携帯の通話を切った。

そのまま、上条の後を追いかけてようとする。

だが、後ろに現れた人物に気がつき振り返った。

「お嬢ちゃん、あの少年のお友達かい？ 図作戦はいいが、それは相手の数がはつきりしないと駄目だぜ。もうじき、こっちの仲間が少年に接触するそうでね。」

少し碎けた口調をしていた。

それを、白井は子供扱いされたと思ったようで少しイラッとする。

だが、その男から見れば白井はまだまだ子供だろう。

現れたのは、男性。年は25から30程度。

身長はそこそ高く、細身ながら筋肉はしっかり付いている。

下はジーンズで上はTシャツの上にジャケット。

黒目で黒の短髪だが、顔立ちは少し高い鼻など日本人以外のが混ざっている。

若干、肌も黒い。ハーフだろうか、と白井は適当に予想する。

「ではあの殿方を狙ったのは、あなたたちというわけですね？」

「まあそうなるな。正確には、『幻想殺し』の力を借りようと思つてね。」

つまり、上条当麻を連れていくということだ。無理やりにも。

だからこそ、あの少年を助けるためここで止めなければならぬ。

「そうですか。では、風紀委員として暴行未遂と誘拐未遂の現行犯で拘束します。」

「やれるかな？」

それを合図に、白井の姿が虚空に消え、男の攻撃は消えてしまった

場所に入る。

攻撃の入った場所にあった、砂、コンクリートの破片、などがまとめて吹き飛ばされる。

上空に『空間移動^{テレポート}』していた白井はその攻撃に疑問を思う。

（？風力系の能力者ですの？見た目では、能力開発を受けた感じがしませんか…。ただの『空力使い』（エアロハンド）でもなさそうですね。）

そして手元にある金属矢を男の肩、足、手に向けて撃つ。

しかし男はすでに移動していた。通常ではありえないスピードで、白井の後ろへ。

「！？なっ。」

「遅い。」

とたんに、白井が消えた。だが、能力を使ったわけではなく、単純に吹っ飛ばされたのだ。

（風？いや、違う。）

15メートルほどやや斜めに上がっていくような軌道で飛ばされた白井が食らった攻撃について考察する。

（風にとばされたというより、とても柔らかい巨大な壁にぶつけられたという感じ…。いや、自分ごと流され、押されるこの現象。）
風に似ている力。そこから導き出した答えは。

「わかりましたわ。あなたの振るう力の正体は、“大気圧”でしょう？」

空中から『空間移動』して着地した白井が言う。

「ほお、もうわかったのか。数回しか使っていないのにな。」

関心した男は素直に称賛する。

このあたり余裕が感じられるため、少しむっとした白井だったが話を続ける。

「あなたは周りの大気圧を操作して攻撃、移動を行っていますのね。」

攻撃を受けた時、強烈に押された感じがしましたの。その精度ではもはや『空力支配』^{エアロマスタ}とでも言った方がいいかもしれませんわね。」「何気に生活しているが、本来地球上では大気による気圧で押されている。

その力は、 τ の位まで到達する。

人間は内側から押すことで気圧の力と釣り合っているが、中を真空にしたドラム缶がつぶれるように、もともと気圧はすさまじい威力を持っている。

しかし。

「残念。」

「何ですって？」

「大気圧は使っているが操作はしてないし、移動には使っていない。押された感じだって本来の形ではない、なぜなら……」

男の顔には笑みがある。

相手を見下した醜いものではなく、自分の実力を信じているという自信の笑み。

「手加減してたからな。」

そのことを聞いて、白井の頭に少し血が上った。

闘っている相手に手加減されたことなど初めてなのだ。

「そこまで言うなんて、余裕ですね。」

「俺さ、人殺すの嫌いなんだよ。そうゆうことだから優しく潰すぜ、お嬢ちゃん。」

男の姿がぶれる。白井の姿が虚空に消える。速すぎるその攻防は行われる。

「今のところ、動きはないそうです。様子見といったところでしょうか。」

ここは、デパートのコンピュータールーム。

現在『風紀委員』の権限で、この部屋を特別に使っていた。

中にいるのはコンピューターを使う初春飾利、そこで待つ御坂美琴、インデックス、佐天涙子の4人だ。

「そう、わかった。情報が出たら教えてね。」

御坂はそう言つて壁に寄り掛かった。

佐天とインデックスは1つの長椅子に腰かけている。

「…とうま、大丈夫だよね…。」

「大丈夫だよ、なんだつてあの白井さんがついてくれているんだから大丈夫に決まってるよ。」

そういうが、佐天も内心あの少年を心配していた。だがそれ以上に、自分の仲間を信頼しているのだ。

（わたしは…この状況じゃ待つことしかできないけど……。でも、きつと大丈夫。）

そう思っている佐天の横で、御坂もあの少年と後輩の心配をしていた。

（アイツ、またこんなトラブルに巻き込まれるなんてねー。黒子も気合出しちゃつてさ。何もなければいいけど…。あーあ、なんか散々な買い物になっちゃったなー。）

その表情にあるのは、不安。本当は今飛び出していきたいが、『^{レム}残骸』事件の後で入院していた黒子の言葉を思い出すとその気も失せた。

黒子の覚悟に水を差すのも駄目だろう。

あの少年の思いにも。

それは自分への言い訳、助けに行きたい自分の心を抑える砦。

御坂美琴もまた、待つという選択肢を取った。

だが、この少女だけは違った。

（とうまはいつも、いつも！いつも！心配させるんだから。……少しは残される人のこと考えてほしいかも。………たしかに、超能力のことだと自分は役に立ちそうにないけど………けど………でも！）

少女は立つ。

今まで守られてきた少年のもとへと向かうために。

今まで助けてくれた、その少年の助けになるために。

（じっと待ってるなんて、もう嫌だもん。）

インデックスは既に、残されるというこの自分に限界だったのだ。ただ、ずっと思っていたこと。

彼が記憶を失う前から彼女が思っていたこと。

彼に傷ついて欲しくない。彼を助きたい。

そんな感情が、彼女を行動に移した。

「ちょ、どこ行くのよ！」

口ではそう言った御坂だった……。

が、さっきの思っていた自分への言い訳もこの少女の行動で、心の天秤が傾いてしまった。

（……………わかってる、アイツや黒子が、どんな思いでいるかくらい……………。

……………でも、私にとっては、アンタ達のプライドよりアンタ達の安全の方が重い！！）

そのまま、あの二人のもとへと行くことを心の中で決めた。

御坂美琴も走りだす。

インデックスに続く。

後輩やあの少年の思いもわかるが、それ以上に力になりたいという思いの方が強かったのだ。

そして、あの少女と同じ道を選んだ。
待つよりも、助けに向かうという選択肢を。
後ろでは、佐天や初春が二人を止める言葉を発していた。
だが、彼女たちを止めるには不十分だった。

男は走る。

通常ではありえない速度で。

少女は飛ぶ。

『空間移動』という能力を使って。

男は地上を移動し、白井は空中で狙う。

だが男が速すぎて白井の金属矢ではなかなか狙えない。

男は白井に向かって大気圧の砲撃を放つ。

それを避けながら、白井は考えを張り巡らせる。

（あの能力はかなり『超能力者』に近い『大能力者』だと思いますが……。使えるのが大気圧だけだと思わない方がいいでしょう。移動手段がわかりません、しっ！と、しかし、いくらなんでも速すぎません！？）

白井は地上に『空間移動』し、ビルの屋上の古くなった石の床板を男の進行方向へと飛ばす。

しかし、男は回避。

なおかつ、白井へ素早く砲撃を放つ。

白井はそれをかわして男の後ろへ『空間移動』し、接近戦へ持ち込む。

（この、ですわ。）

足払いで男のバランスを崩そうとしたが、男も人間離れた反射神経でそれをかわす。

お互い向き合って組み手のような状態になるが、男の不自然なほど速い掌底が白井の鳩尾に決まる。

そのまま後ろへ2、3メートル吹っ飛び仰向けに倒れた。

「ぐ、……かは、ごほっ、ごほっ。」

強い攻撃により息ができなくなり、はあ、はあ、と息切れし、不規則な呼吸になる。

しかし、白井は立ち上がり攻撃の態勢をとる。

「まだやるのか。今ので気絶してくれればよかったのに。女性は特に傷つけないんだよ。英国紳士だからね。」

その調子のままだった。

ものすごい速さで駆け巡っていたのにもかかわらず（いくら1発も食らってないからと言って）その表情に疲れはなかった。

それに比べて、『空間移動』を使い続け散々動き回り、急所にダメージを負った白井は満身創痍だった。

しかし、白井はその状態にもかかわらずその様子に疑問を持つ。

（？おかしいですの。あの殿方には疲れや怪我などがなく、あの調子のままだというのに……なんで、顔色が悪いんですの？）

よく見なければわからないほどだったが、確かに男の顔色は不自然に白かった（色黒だが）。

青くはなかったが白かったのだ。調子を崩した病弱な人間のように。「あなたが英国紳士だろうと日本男子だろうと興味はありませんの。」

「そうかい。まあ、女性を傷つけてるから、英国紳士としては失格だろうしね。そういう君はもう余裕がないみたいだけど？」

「わたくしの力は、一撃必殺ですの。一撃でも決まればけりがつきますわ。時間はまだまだありますのよ。」

「そうかい。それは楽しみだ。」

男の姿がぶれる。白井の方へ突っ込み自ら接近戦を仕掛けてきた。

「この状態で演算できるのかな？」

（くっ！）

この状態、頭を使う演算をしながら接近戦で組み合うのは能力者にとって絶望的だった。

しかも、白井の『空間移動』は特に複雑な演算が必要になる。

男は手刀で白井の肩を狙ってきた。

しかし不自然な速さも事前に読んでいた白井はかわすことに成功した。

しかし、その次の演算までは思考が追い付かない。

そう、白井が普通能力者なら…。

「なめるな、ですの。」

白井の手が男の肩にふれ、男を『空間移動』する。

男はそのままビルの屋上の床に埋まりコンクリートの縄で絞められているような状態だった。

しかも、屋上の床は何層にもなっていて、縄の数は多い。

男の体がコンクリートを押しのけて転移したため、締め付けられることはなかったが身動きができる状態ではなかった。

柱や壁に埋もれていたら、重さで潰れていたであろうが、屋上のこの床ではその限りではないようだ。

「わたくしこれでも学園都市の中で千人ほどしかない『大能力者』で常磐台に所属していますの。『風紀委員』の訓練で複雑な演算を戦闘中にこなすこともやってますのよ。まあ、今のはひやひやしましたのですが結果は結果ですのよ。」

「やるなあ、お嬢ちゃん。『超能力者』も狙えるんじゃないのか。男の調子は変わらなかった。」

そこにあるのは素直な称賛だけだった。

「そのためにここまで努力してきたので。わたくしは甘くないんですのよ。」

「まあ、正直ここまでできるとは思わなかったぜ。お嬢ちゃんも殺さないように努めてたところも流石だと思うよ。だけどさ…。」

バチィ！と音がして白井の体から感覚が抜け、その場に倒れこむ。

男はそのまま、コンクリートをプールから出るように砕き、自分の腕力で這い出てきた。

その体に怪我はない。

コンクリートの摩擦があつたというのにだ。

「まだまだ、経験が足りないな。空気を使っているんだと思ったら空気摩擦によって静電気が作れることぐらい気がつかないや駄目だぜ。そのまま痺れててくれ。」

「がっ…、……う。」

「ここまでやれた、お嬢ちゃんにサービスだ。自分の名前を教えよう。」

白井の意識はギリギリだ、もはや聞くことで精一杯。

だが、聞くことに集中する。

手掛かりとなるなら何でも聞く。

白井黒子は『ジャッジメント風紀委員』だから。

「俺の名前は、デューイ＝奇水＝ウルフィック。」

ゴト、と白井の態勢が完全に崩れた。

名前を聞いたから、手掛かりをつかめたから、気が少し抜けたからだろう。

完全な気絶。

男はそれを見たが、構わず続ける。

「魔法名、culmen305だ。」

デューイと名乗った男はその場を去った。
結果は、白井黒子の完敗だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3335ba/>

とある覚悟の魔術結社(マジックキャバル)

2012年1月12日21時52分発行